

七レポート

知的障害者支援の
現場から見えるもの

七レポート制作委員会◎著

はじめに

知的障害者、そう呼ばれている人達があります。そのことは確かなはずなのです。何故なら、その人達のための法律もありますし、その人たちのための相談機関や、様々な機能を持った施設もちゃんと存在し、そこには職員と呼ばれる人間が大勢働いているのですから。にもかかわらず、知的障害者とはどんな人達を指して言うのか、どのくらいの人数がおられるのかといったことになると、どうも、はっきりとしません。

ひょっとすると、本当は、そんな人達はいないのかもしれない。ただの勘違いだってこともあるかもしれないのです。これは、大きな謎といえます。そしてこの謎は、私達が何を置いてもどうしても解決しなければならぬ問題だという気がします。それは、私達一人一人のあり方や、私達の暮らす社会のあり方そのものへの問いかけでもあると思えるからです。

ちなみに、この国では60万人余りの人が、療育手帳とか愛の手帳とかそういう呼ばれ方をする（その呼び名さえ決まっていません）ものを交付され、言ってみれば、その地域のお役所から、あなたは知的障害者であると言う認定を受けて生活されています。どうやってそれを決めるのかは、地域毎に少しずつ違っているようですが、いずれにせよ、ここでその人には何らかの手助けが必要であるということになるわけです。でも、本当は少なくとも、その4倍くらいの人に手助けが必要なのではないかといわれています。実際のところどうなのでしょう。そして何故その人達は手助けを求めないのでしょうか。多分今の段階では調べ様もないのだと思います。また、この60万人余りの人についても、各々がどんな手助けを必要としているのか、実はよくわかっていなかったりする場合が殆どようです。よく解らないので、仕方ないから誰かそばにいてその都度対処しましょうかというのがほぼ現状だと考えていいかもしれません。そして結果が外から見て、まず、上手くいってるな、ということならそれは正解だったというこ

とになりますし、そうでなければ間違いだったということになる。勿論どうしてそうなったのか確かなことはやっぱりわかりません。つまり、何もかもわからないという状況だと考えたほうが良さそうです。

しかし、解らないから、難しいから、面倒だからといってそのままにしておいていいという訳でもないという風にも感じてしまいます。せめて、解るための努力を少しずつでもつないでいかなければ、どこに向かえばいいのかどうにもはっきりしないなか、ただ行き当たりばつりに歩かざる得なくなるような気がしてならないのです。

ですから、取り合えず今どんなことが解っているのか、どんな理解が可能なのか、現状はどうなっていて、今後どんな形を目指していけばいいと考えられるか、と、いった事を一先ず纏めておきたい、そんな考えが頭にいつのまにか張り付いていました。

ところがことはそう単純ではありません。様々な事象が複雑に絡み合い、その上人間という存在そのものに関わるような大変大きな問題まで含まれていたりします。これを試みるのだとすると、これは闇雲に突っ込んでいくのは得策とはいえないようです。何か大まかな戦略というべきものを取り合えず立てたほうがいい。そこでこんなことを考えました。

先ず、其々のテーマの深く専門的なところには余り立ち入らないようにしたほうが良さそうです。兎に角、大きな筋道というのが浮かび上がってくればそれでいいわけですから、一つ一つ細かなところに拘って迷路にはまり込んでしまう危険は避けたいと思います。次に、出来る限り、感覚的な或いは形而状学的な抽象性の高い話題には触れないようにしなければなりません。変な話、すべては神様の思し召しだということになってしまうとそれ以上進めなくなってしまうからです。なるだけ証明可能な事実を使って追いかけていく、何しろ、今のところ神様の思し召しは多分証明不可

能ですから。それから、人間らしさや生き生きとした暮らしとか、そう言った言葉も、今一つ、はっきりしないので避けたほうが無難でしょう。そして、ある程度大雑把に、いい加減に進んでいくということを意識しておきたいと思います。例えば言葉の定義だとかに、矛盾がないようにとそこに一生懸命になってしまうと、身動きが取れず、堂堂巡りを繰り返す結果にならないとも限らないからです。

なんだか、結局、難しいことは全部後回しにしたような、いかにも適当な方針です。ただ、今の状況では、そうしないと、少し高い視点からおよその姿を俯瞰することは出来ないと思えます。おりしも私達がこの問題と向き合って丁度10年という月日がたちました。いつまでも、いたずらに引き伸ばしているより、これを期に、思いきって取りかかってみることにしようと思心しました。そんなわけで、いろいろな点での不備や、混乱などが沢山出てくるかと思えます。又、今後新たに解ってくることによって、その内容は大きく変化するかもしれません。しかし不完全ではあっても、出発すべきときに来ている、そう感じています。出発しさえすれば、自ずと問題は浮かび上がり、次第に洗練されていくことになる筈です。真っ直ぐに向き合うことを、これ以上避けていては前に進めない。そんな思いを受け留めていただければと願っています。

目 次

はじめに

| | | |
|------------|--------------|----|
| 1 章 | 知的活動 | I |
| 1 節 | 脳 | 3 |
| 1 | 神経細胞の働き | 4 |
| 2 | 脳の構造 | 6 |
| 3 | 神経系の仕事 | 8 |
| 2 節 | 意識世界の成り立ち | 10 |
| 1 | 視覚情報の処理 | 10 |
| 2 | 意識に上がらない処理たち | 14 |
| 3 | 意識世界の構造 | 16 |
| 4 | 注意機能 | 19 |
| 3 節 | 知的活動 | 22 |
| 1 | 人の歴史と脳 | 23 |
| 2 | 脳と社会構造 | 26 |
| 3 | 知的活動 | 29 |
| 2 章 | 知的障害 | 33 |
| 1 節 | 発達 | 35 |
| 1 | 脳の発生 | 36 |
| 2 | 臨界期 | 37 |
| 3 | 知的発達について | 39 |

| | | |
|------------|------------------|-----------|
| 2 節 | 推測される差異 | 41 |
| 1 | 注意機能と感覚受容 | 42 |
| 2 | 言葉、概念、意味のカテゴリー | 46 |
| 3 | イメージやストーリーと現実の混乱 | 49 |
| 3 節 | 社会という要素 | 52 |
| 1 | 基本的な条件 | 53 |
| 2 | 生み出される状況 | 56 |
| 3 | 社会への参加とリスク | 58 |
| 3 章 | 現 状 | 63 |
| 1 節 | 統計資料などから | 66 |
| 1 | 療育手帳の発行数 | 66 |
| 2 | 施設利用状況 | 68 |
| 3 | 居住場所 | 71 |
| 2 節 | 施策、制度 | 73 |
| 1 | 判定と障害程度区分 | 74 |
| 2 | 施設体系 | 77 |
| 3 | 居住支援、居宅支援 | 80 |
| 3 節 | 暮らしの周辺で | 84 |
| 1 | 生産的な経済活動 | 84 |
| 2 | 消費生活 | 87 |
| 3 | 人為的に作られた情報群 | 90 |
| 4 章 | 七からの報告 | 95 |
| 1 節 | 構造化を廻って | 97 |
| 1 | 構造化に向けての障害 | 98 |
| 2 | 作業所内の構造化 | 101 |
| 3 | 日々の生活の中へ | 103 |

| | | |
|------------|-------------------------------------|-----|
| 2 節 | 暮らしを支える | 106 |
| 1 | 生み出される混乱 | 107 |
| 2 | 路上生活, 触法 | 110 |
| 3 | リスクに対する考え方 | 115 |
| 3 節 | 間違えてしまったこと, 失敗してしまったこと, 上手く行かなかったこと | 117 |
| 1 | 支えていくということ | 118 |
| 2 | 事業所としてのコミュニケーション能力 | 121 |
| 3 | なにも出来ない | 124 |
| 5 章 | これから | 127 |
| 1 節 | 調査, 研究 | 130 |
| 1 | 実態調査 | 131 |
| 2 | 基礎的研究 | 133 |
| 3 | 現場と研究機関 | 135 |
| 2 節 | 制度, システム | 137 |
| 1 | 場面毎の支援 | 138 |
| 2 | 教育現場からの引き継ぎ, 医療期間との結びつき | 141 |
| 3 | 施設, 事業の組み立て | 144 |
| 3 節 | 社会の全体像 | 147 |
| 1 | 競争の落とし穴 | 148 |
| 2 | 沢山の私 | 153 |
| 3 | 私の価値 | 155 |
| おわりに | | 159 |

1章 知的活動

- 1節 脳
- 2節 意識世界の成り立ち
- 3節 知的活動

知的障害者という名称から考えて、知的活動に何らかの障害があると捕らえることが可能かと思います。では、この知的活動という言葉が何を意味するのかという点になると非常に曖昧でとても解りにくい。ただ一つ、はっきりしたことがあります。それは、知的活動が脳の活動であるということです。厳密にそう言いきれるかとなると少し自信がなくなってくるのですが、先ず、概ねそう考えて間違いないとは言えるでしょう。ですから、取り合えず、脳というものについて見ていかななくてはなりません。ところがこの器官は、恐ろしく入り組んでいて、更に、その全容については、未だ理解できたとは言いがたいようです。

ですから、難しいことはなるだけ避けて、大まかな役割やその基本的な働きなどを中心に考えていきたいと思います。

1 節 脳

私達は、様々な種類の沢山の細胞が集まって出来ています。其々の細胞はその種類毎に役割を受け持ち働きます。例えば肺細胞は集まって肺と言う器官を形成し酸素を取り込む作業をします。肝細胞は肝臓を形成しています。脳は神経系の中心となる臓器ですが、この神経系を形成しているのは、神経細胞と神経膠細胞と呼ばれる二つの種類の細胞です。活動の主役を演じるのは、神経細胞なのですが、この神経細胞は更に非常に沢山の種類に分かれ、いろいろなつながり方でネットワークを作り上げています。つまり、脳や神経系は他の臓器等に比べ、際立ってややこしい構造を持ち、

1章 知的活動

複雑な動き方をするとさえそうです。しかしそれは驚くにはあたらないのかもしれない。何故なら、神経系は、頭为天辺からつま先まで、肺だろうと胃だろうと、心臓だろうと、とにかく体の内側といわず外側といわず、その個体に関わる膨大な量の、情報を取り扱わなければならないのですから。

さて、脳ですが、これは、体の前のほうにある神経細胞のこぶと考えればいいようです。何故前にあるかというと前に向かって進むから、(人の場合立ち上がってしまったので上になっちゃいましたが)つまり、進行方向からくる刺激が当たり前ですが一番多いので、その刺激を受け取るための感覚細胞が前に集まったほうが有利だったということのようです。そんなわけで、脳らしきものは、無脊椎動物にも見られますが、やはり、硬い骨の中に収まった脊椎動物の脳が私達には脳らしく思えます。脊椎動物のなかで哺乳綱に属する生き物では、相対に脳が大きい、特に類人猿と呼ばれる仲間は、体の大きさとの比で優位に大きいといわれています。中でも、人の脳の大きさは群を抜いています。つまり、この、脳の大きさが人という生き物の大きな特徴と言えるわけです。これは、人独特の形態というものを造ることにもなるわけですが、もっと大切なのは、人独特の行動の形というものを生み出した点にあるのかもしれない。この行動を作り出すための非常に複雑な仕組みが、実は大きな問題を抱えることになります。調べてみれば、最大の武器が、一番の弱点ともなってしまうわけです。

何はともあれ、では脳とはざっとどんなものなのか、少し見ていきたいと思います。

1 神経細胞の働き

脳は言ってみれば神経細胞の大集団です。では神経細胞とはどんな働き